



戦争に負けた国でヒロシマを抱きしめて

那須正幹を通して「戦争児童文学」を考える

西山利佳



『首なし地ぞうの宝』は「戦争児童文学」ではない

のつけから呆れさせるために告白するわけではないが、二〇二一年、私は初めて『首なし地ぞうの宝』（学習研究社）を読んだ。那須さんが亡くなったから、というわけではない。一〇月に〈子どもの本・九条の会〉のイベントを広島で開催すべく準備を進めていて、那須さんも登壇予定だったからだ。一九七二年刊行のそれは、いわずと知れた那須正幹初めての単行本である。そこには、ズッコケの三人ぐみを彷彿とさせる三人ぐみがあり、地図があり、宝探しがあった。しかし、「戦争」の「せ」の字もない。目次には「八月十九日」が出てくるが、八月六日も一五日も出てこない。「現代の少年少女がなぞをといていくと、「戦争」に行きあたるといふ物語」を、次第に形成された「戦争児童文学」という概念が持ってしまったパターン^{注1}として指摘し、そこからの脱却を提案したのは宮川健郎だ。宮川は、「戦争児童文学」の枠組みに囚われて書いてしまうことへの批

判に筆を割いているが、「問題なのは、(略)それを「戦争児童文学」として読んでしまふ、私自身なのだろう。私や私たちのなかにある「戦争児童文学」という考え方の枠組そのものが相対化されなければならない」とまづ書いていたのだった。謎解き、時は八月……そこに「戦争」を期待してしまつた私の中の枠組みに気づかされた次第である。

「戦争児童文学」という言葉は、子どもたちの「カッコいい戦争観」に危機感を持つた小学校教師石上正夫が一九六三年ごろから使い始めたという。「子どもたちのゆがんだ戦争観」を軌道修正するために「戦争を描いた文学作品に出あわせる」ことを考えた石上は、「戦争児童文学」という区分を意識的に使つたといふ^{注3}。その結果、戦後三五年の間に約三五〇点の「戦争児童文学」を数え、それらの埋没を食い止めるために編まれたのが『戦争児童文学350選』といふことだ。このブックガイドは一九八〇年に出版されている。しかし、一九七五年にすでに単行本になつて